論　文　内　容　要　旨

シェーグレン症候群患者における口唇腺生検所見と唾液腺機能の関連についての研究

神奈川歯科大学大学院　顎顔面外科学講座

島田　健雄

（指　導：久保田　英朗　教授）

論　文　内　容　要　旨

シェーグレン症候群(SS)の診断で，口唇小唾液腺の生検組織における，小葉内導管周囲の単核細胞の浸潤程度が，最も重要な診断指標と考えられている。本邦の診断基準では,「小唾液腺生検組織の小葉内導管周囲に50個以上の単核細胞の浸潤巣をfocusとみなし、4mm^{2}あたりのfocus数をfocus score(FS)とよび、FS１以上を陽性」としている。SSの診断においては,これに加えて唾液腺機能の評価が重要である。本研究では，1999年のシェーグレン症候群改訂診断基準で,SSと診断された患者の口唇小唾液腺生検組織上のFSと唾液腺シンチグラフィ上の大唾液腺機能を比較し，口唇小唾液腺生検でのFSの多少が，大唾液腺の機能低下所見と関連しているのか詳細に検討した。

ＳＳ患者を、口唇腺生検所見で小葉内導管周囲に50個以上の単核細胞の浸潤程度によって、１≦FS＜2ならびに2≦FSの2群間に分けた。大唾液腺機能の評価法については，Tc-99m-pertechnetateを用いた唾液腺シンチグラフィを用い，唾液腺シンチグラフィ上の動態曲線(TAC)パターンから唾液腺機能を評価した。^{99m}Tc唾液腺シンチグラフィ上のtime activity curve（TAC）のパターンと集積率（MAX%），排泄率（EX%），最高集積に達する時間（T-MAX)等を検討し，^{99m}Tcの取り込みが正常で40％以上の排泄率を示す（Ｎ型），40％以下の排泄率の（Ｐ型）,取り込み率と排泄率が低下した（M型），取り込み率が著しく低下し排泄もほとんどない（Ｆ型）の４型に分類し、Ｐ，Ｍ，ならびにＦ型は機能低下ありとした。

その結果、2≦FSの群のほうが大唾液腺（耳下腺、顎下腺ともに）の機能低下率において統計学的に有意差を認めた。また，SS患者の耳下腺と顎下腺の腺機能低下率を比較すると,両者間に統計学的に有意差を認め、顎下腺の機能低下が顕著に認められた。以上の結果から,口唇腺生検上のFSが,唾液腺シンチグラフィ上認められる大唾液腺機能の低下所見を反映している可能性が示唆された。また，SS患者の唾液腺機能は,耳下腺よりも顎下腺の方が影響を受けやすい可能性も示唆された。